

結核菌感受性試験 極東 PZA液体培地の検討

吉多 仁子, 所 知都子, 浅田 薫, 浅井 浩次, 北橋 由紀子, 谷川 信子
(大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター)

目的：新指針では、結核菌の PZA感受性試験についての十分な記載はない。しかし、当院検査室では、1999年 5月より極東 PZA液体培地を用いている。今回われわれは、臨床分離株を用いた本法の耐性基準濃度及び、2003年度の治療別耐性状況を検討した。

対象：検討については、2003年 6月から 8月の間、臨床分離された 35株について行った。耐性状況については、2003年 4月から 2004年 3月の間、臨床分離された 334株について行った。その治療歴は、初回治療 26株、再治療 6株であった。方法：接種菌液は、マイコプロス液体培地を用い、McFarland No.1に前培養を行った。10倍希釈菌液を PZAQ 10Q 400 μ g/mlに 100 μ 接種した。37、約 1週間間の培養の後、判定を行った。pHの違いによる発育をみるため、pH5.85から 6.05の 5種類の培地を用いた。

結果：各検体の 0 μ g/mlの発育を + + + とした。4株は耐性であり、残り 3株は感受性であった。100 μ g/ml、400 μ g/mlの濃度で菌の発育が全くみられない - であれば判定は明瞭である。- は 100 μ g/mlが 55%、400 μ g/mlが 84%

であった。100 μ g/ml に比べると 400 μ g/mlの濃度のほうが、判定は明瞭であった。pHが低いと結核菌の発育は困難である。pHが上昇するに従い、結核菌の菌量がどれだけ増加したかをみた。35株中 16株に変化はなかった。残り 19株中、400 μ g/mlは、3株 (16%)に pHの上昇による菌量の増加がみられた。100 μ g/mlは、19株すべての株で菌量の増加がみられた。

2003年度の治療別耐性状況についてみた。対象とした 334株中耐性は、18株 (5.4%)であった。このうち初回は、4株 (1.1%)あった。PZA単独耐性株が 3株検出された。再治療は、14株 (4.2%)あった。PZA感受性は、初回 263株 (78.7%)、再治療 53株 (15.9%)あった。

考察：判定が明瞭であること、pHによる影響を受けにくいことから耐性基準濃度は 400 μ g/mlが使用されるべきだと考えられた。

連絡先 0729-57-2121(内線 2577)